Gymnasium成立史考

Zur Entstehungsgeschichte des Gymnasiums

山　内　芳　文・三　輪　貴美枝

【要　旨】

この省察では、19世紀の前半いらいのドイツで大学への進学を目的としてきたギムナジウムについて、その名称の学校が成立した事情を歴史的に探ってみることにしている。その名の学校の存在が確認されるのは、1538年のシュトラスブルク（ストラスブール）で、ヨハネス・シュトゥルムが関わって創設された学校においてであった。ギムナジウムの名称は、ヤコブ・ヴィンプフェリンクの歴史書『ゲルマニア』(1501）に付された学校の構想にさかのぼり、さらにはヨハネス・ガイラー、このライン河畔の町には、エラスムスだけでなく、多くの篤信のフマニストが関わりをもっていた。その流れは遠くカルル大帝の時代にまで遡ると、カルル・エンゲル（1886）は言っている。本省察では、今日まで最も基本的な文献資料とされている、そのエンゲルの文献を手がかりに、ひとつのヒストリーを描いてみた。カルル大帝のカロリング・ルネサンスから始まって、いわゆる12世紀ルネサンス、活版印刷術の発見、それにライン河畔のフマニスム、宗教改革を背景に、司教座の学校や修道院の学校、さらには都市の学校が離合集散を繰り返し、やがて宗教改革をおおきな動因として、フマニスムをコアとしたギムナジウムが成立してゆく過程をたどった。その凝縮された過程はメランヒトンが創設に直接関わったニュルンベルクの事例にみられるが、これを扱った補説を付した。

【キーワード】

ギムナジウム　　シュトラスブルク（ストラスブール）　　ニュルンベルク
宗教改革　　ラテン語学校

【Abstract】

In diesem bescheidenen Aufsatz forschen die Verfasser geschichtliche Umstände der Entstehung der Schulen mit dem Name des 'Gymnasium's nach, das öffentlich seit der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts als solch bezeichnet und bis heute als typische Prä-

ferenzschule zur Universität anerkannt worden ist. Das ist an der von Johannes Sturm begründeten(1538) Straßburger Schule, dass man solchen Name zu erst bestätigte. Nebenbei gesagt, findet sich die Bezeichnung des Gymnasiums selbst in Jakob Wimpfelings Geschichtsbeschreibung '*Germania*'(1501). Aber damals in der Städte am Rhein gab es viele fromme Humanisten z.B. Erasmus und Johannes Geiler, den Wimpfelings Lehrer, usw. und sodann betreffend das Wimpfelings wichtige Grundwerk weiste auch Carl Engel darauf hin (1886), dass dieser Stamm ursprünglich die Zeit des Karl des Grossen erreicht. Unser Beschreibungsgang ist folgendermassen gestellt : im Hintergrund der Karolinger Renaissannce, der sogenannten Renaissance des 12. Jahrhunderts, der Erfindung des Typendruckes, des Humanismus am Rhein und der Reformation, erklärt sich der komplizierte Entstehungs- und Entwicklungsverlauf des alten Gymnasiums (Zusammenkommen und Wiederauseinandergehen der Stadtschule, Stiftsschule und Klosterschule, u.a) mit Kern des Humanismus. Auf die nürnbergische Schulreform, mit der Melanchton sich beschäftigte, findet sich ein kondeziertes Aussehen, über das ein ergänzender Abschnitt dafür beigelegt wird.

【Keywords】

Gymnasium　Straßburg　Nürnberg　Reformation　Lateinschule
（Gymnasium　Strasbourg　Nurnberg　Reformation　Latin School）

はじめに

現在のギムナジウム（Gymnasium）はドイツの中等学校のうち、大学への進学を目的とした学校の総称である。このギムナジウムは、本来はラテン語教授を中心とするラテン語学校（Lateinschule）が15世紀から16世紀にかけて、ドイツ・フマニスム（人文主義）の影響のもとに、たとえばパエダゴギウムPaedagogium、リツォイムLyceumなどの古代ギリシア由来のラテン語の校名とともに成立したとされている。そのギムナジウムが固有名詞から普通名詞、すなわち大学への進学を目的とした中等学校の公称を獲得したのは19世紀になってからのことであった。プロイセンにおいては、すでに18世紀の末に大学入学試験（Abiturientenexamen）が導入されていらい、叢生している種々の学校の整理が政策的な課題となっていたが、1812年に大学入学試験を実施できる学校（Gymnasium）とそうではない学校（Nicht-Gymnasium）との区別が法制化されることで、それは一定の落着をみた。もちろん、その間にも、ギムナジウムを名乗る学校がかなり存在し

ていたことは言うまでもないが、その嚆矢となったのは、16世紀の前半、シュトラスブルク（Straßburg、フランス名ではストラスブールStrasbourg）のギムナジウム（Gymnasium）であった。フリードリヒ・パウルゼン（Fr. Paulsen 1846-1908）の畢生の大作である『教養教育史』（*Geschichte des Gelehrten Unterrichts.* 2. erweiterte Aufl. Bd.1. 1896 SS.160-161）では、その事情が簡略に語られている。

「数世紀にわたって、下流部ラインのケルンとおなじように、上流部ラインのスコラ派の拠点であったシュトラスブルクは、中世末期に4つの教会附属学校（Stiftsschule、大聖堂、聖トマス、新旧の聖ペテロ）をもっていた。それに加えて、一群の修道院学校（Klosterschule）があった。さらに、聖ドミニコ、聖フランシスコ、聖アウグスティヌスの修道会は、それぞれの地域に、高等神学院（studium generale）ももっていた。16世紀のはじめには、キリスト教の教会の世界観という土台に立ちながらも、人文的な教養の推進を志向する一群のひとたちが認められる。大聖堂の説教師カイザースベルクのガイラー（Johannes Geiler von Kaisersberg 1445-1510）、市役所書記セバスティアン・ブラント（Sebastian Brant 1458-1521）、さらに聖俗の著述家であるヤコブ・ヴィンプフェリンク（Jakob Wimpfeling 1450-1528）などであった。ヴィンプフェリンクは、1501年の著作『ゲルマニア』（*Germania*）のなかで、ギムナジウム（Gymnasiumドイツ語で剣闘学校 Fechtschuleと付記）の設立について、市参事会に対してひとつの提案を行った。」（生没年は引用者）

そのヴィンプフェリンクの提案は、大学（universitas/Universität）への接続を実質的に保証する教育課程の整備がその趣旨であったが、その具体的な内容は後に触れることとして、ここではギムナジウムという古代ギリシア由来のラテン語名称の端緒がヴィンプフェリンクの提案にあったということ、さらにその名称がこの時点でさほど馴染みのあるものではなく、あえてドイツ語訳を付さなければならなかったという事実のみを指摘しておく。また、ヴィンプフェリンクについては、後で示すように、すでにいくつかの思想研究や人物紹介がなされているが、シュトラスブルクの学校改革への関わりについて言及をしているものは、意外に少ない（H.Höhnk, ***Jakob Wimpfeling*** in：W. Rein, *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik.* Bd.7. 1895. S.646 以降、いくつかの記事がある。それに本邦では、内田日出海『物語 ストラスブールの歴史』（中公新書2009）のわずかな叙述（97-98ページ）がある）。これらによれば、ヴィンプフェリンクはガイラーの教えを受け、ヴィンプフェリンクの弟子で、シュトゥルメック（Sturmeck、この地は現在も確認できない）出自のヤコブ・シュトゥルム（Jakob Sturm 1489-1553 当人はシュトラスブルク生まれ）はシュトラスブルクの市行政の責任者となり、その招きによって学校改革の実務者としてやってきたのがヨハネス・シュトゥルム（Johannes Sturm 1507-1589）である。ヤコブと同姓ではあるが、縁戚関係にはない。ところで、パウルゼン自身、その増補改訂（第2版、1896年）にあたって、前の段落で掲げた叙述を、ある古典的な研究から援用していると注記している。それは、1886年にシュト

ラスブルクのギムナジウムで刊行された学校年報（1886/87）に掲載された上席教諭（Oberlehrer）のエンゲル（Carl Engel 生没年をはじめ、詳しい経歴は不明） による「1538年のプロテスタント・ギムナジウム設立以前のシュトラスブルクの学校制度」（*Das Schulwesen in Strassburg vor der Gründung des protestantischen Gymnasiums 1538*）であった。このエンゲルの報告こそ、ヴィンプフェリンクの提案にとどまらず、シュトラスブルクのギムナジウム成立史研究にとって、同時代人であるパウルゼンにおいてすでにそうであっただけでなく、現在においてもほとんど唯一の基本的な資料である。もちろん、ガイラーやヴィンプフェリンク、それにヨハネス・シュトゥルムについての比較的詳細な研究は散見される。しかしながら、当代におけるシュトラスブルクのギムナジウム成立の事情については、これを措いて他にはない。この省察におけるシュトラスブルクの学校の変転に関わる事実の提示は、特に断りのない場合、主として、このエンゲルの研究によっている。なお、煩雑になるので、エンゲルの引用の箇所（ページ数）は、一次資料の重引などの特に必要な場合を除いて、あえて記さない。

Ⅰ．学校改革の起源

大聖堂と多くの教会の尖塔が天空に聳え、修道院が市街地を囲む司教都市として、ローマ教皇から永遠に忠誠とみられていたシュトラスブルクが福音派（ルター派）へと転向したことについては、「市当局が宗教改革運動を取り込んでしまう」（内田 前掲書106ページ）事態であったと言ってよい。その発端は、これまで漫然と構えていた市参事会が市行政を掌握、シュテットマイスター（Stettmeister、市の行政担当者で数名から構成）のヤコブ・シュトゥルム、セバスティアン・ブラントの甥でアムマイスター（Ammeister、市の形式的な代表者）のマティアス・プファーラー（Mattias Pfarrer 1485/86-1568）やボック（Hieronymus Bock 1498-1554）といった人物に市運営が委ねられた。教会や修道院の役僧の処遇は、市参事会の任命する委員会の手に委ねられたことにある。彼らを中核とする都市の門閥を中心とした市参事会多数派による福音派への傾斜は、1524年の市参事会員の改選によって、聖職者の市民への編入と婚姻の自由、教会関係財産の市当局による管理への移行などで、実質的に教会は解体され、市当局の営造物となった。この間、修道士や修道女たちは潰走し、残された建物や財産は救貧施設などに組み入れられた。残された教会も、マルティン・ブッツアー（Martin ButzerあるいはBucer 1491-1551）の主宰する教会会議に管理されることとなり、聖トマスをはじめ、いくつかの教会も新たに福音派の教会として再出発が図られることとなった。しかしながら、その再出発には時間を要した。ヤコブ・シュトゥルムとブッツアーとの確執もそのおおきな原因なのであろう。かのジャン・カルヴァンがブッツアーとの縁でジュネーヴ（ゲンフ）からシュトラスブルクに移住し、聖トマス教会の最初の牧師に着任したのは1538

年、カルヴァン28才のときのことであった（翌年に『キリスト教綱要』第2版を出版、離任は1541年）。この年、奇しくも、ヨハネス・シュトゥルムによる新しい学校が開設されるのである。この省察では、そのヨハネス・シュトゥルムに至る長い道程をたどることで、宗教改革の結果として描かれてきたにすぎないギムナジウムの成立前史に伏在してきた転変に富んだ層位を掘り起こしてみることにしたい。

それにさいして、あらかじめ、シュトラスブルクの学校改革、そしてギムナジウムの成立の契機となったとされる宗教改革の当地への影響について簡単に整理しておく。パウルゼンは、ヴィンプフェリンクの提案の簡単な紹介にとどめ、 宗教改革前後の動向を省略して、ヨハネス・シュトゥルムの学校改革への叙述に入っている。その間隙は、ヴァルター・ゾーム（Walter Sohm 1886-1914）によって指摘される「教会と学校」という対立の図式が支配する時期であり、「シュトラスブルクの俗権は教会と学校に秩序づけの権力として現れる」（*Die Schule Johann Sturms und die Kirche Straßburgs in ihrem gegenseitigen Verhältnis.* 1912. S. 12）ということになる。ゾームの指摘する問題は、その俗権のなかでの、例えば、かつてのドミニコ会士で、いまやルターに心酔するブッツアーとヤコブ・シュトゥルムとの協調と離反といった事態である。教会の几帳面な組織化へのブッツアーの関心が影響力を持ち始める。この経緯について、ゾームは、「これこそが、ヨハネス・シュトゥルムによる学校がその古典的な形態を見出すことになった」（Sohm, op.cit. S.13）と言う。つまり、ヤコブ・シュトゥルムの純粋ルター主義者ブッツアーへの対抗がヨハネス・シュトゥルムの招聘、さらにはギムナジウムへの道を開いたと言うのである。たしかに、結果からみれば、そのような理解も可能であろう。シュトラスブルクの学校改革をルネサンスの北漸と宗教改革という事態で把握しようとする傾向も、きわめて一般的である。シュトラスブルクのギムナジウムの副校長のハインリヒ・ファイル（Heinrich Veil）は、1910年の論文で、「わがギムナジウムは宗教改革の産物であると同時に、はじめイタリアに、つづいてひとがフマニスムと呼んでいる15、16世紀に他のヨーロッパ諸国で結実した稔り多い精神運動に結びついている」（H. Veil, *Das Protestantische Gymnasium zu Straßburg 1538-1888.* 1910. S.5）と言っている。したがって、ファイルは、その前史をあえて1538年以前にまでたどろうとはしていない。現代ドイツの研究（例えば、N. Hammerstein (Hrsg.), *Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte.* Bd.1. "*15. bis 17. Jahrhundert*". 2000. など）、また現在の所在地であるフランスにおける研究の状況（例えば、Pierre Schang et Georges Livet, *Histoire du Gymnase Jean Sturm: berceau de l'Université de Strasbourg, 1538-1988.* 1988など）も同様で、創設以降の叙述は詳細であるが、あえて創設以前にまでは遡らない。

シュトラスブルクの教会附属の学校については、パウルゼンの一般的な整理にしたがって（Paulsen, *Das deutsche Bildungswesen in seiner geschichtlichen Entwicklung.* 1912. SS.7f.）、司教座教会（Stiftskirche）のすべてに後継者の養成を目的とした学校の設立が命令されているこ

とに注目すれば、その成立はおそらくカルル大帝のカロリンガー・ルネサンスの時代にまで遡ることができるであろう。大帝の指示にもとづいて、アーヘンの教会会議（789）では、すべての修道院や司教座に、そこで少年たちが賛美歌、読み、唱歌、祝祭日程の算出、そしてラテン語を学ぶ学校を置かなくてはならないとする共通の義務を定めた。より高い証明は試験によってのみ授与され、そこでは知識の獲得が明確な尺度をとって確認される。その職業の訓練に必要な、すべての聖書の知識やその理解、ローマの様式による唱歌のほかにも、もちろんすべてをラテン語で書類や書簡を書く技能も、その対象となった。その多くの事業にイングランド出身のアルクィンが関わった。しかしながら、その学校はあくまで後継者の養成を主目的としていて、庶民の教育までカヴァーしていたわけではない。そのようなシュトラスブルクの学校が頂点の輝きを示したのが、フランク王国から派生した神聖ローマ帝国、10世紀の後半のオットーⅠ世の時代であった。シュトラスブルクの司教ウト（Uto）、さらにその後継者エルカンボルト（Erkanbold 965-991在職）は宮廷や教会の学校に関係した。彼は帝のイタリア行幸に供奉し、多くの手稿本をシュトラスブルクにもたらした。帝妃アデルハイト（Adelheid）やテオファノ（Theophano）の支持も強かった。エルカンボルトの最大の功績は、スイスのザンクト・ガレンの修道院から修道僧ヴィクトール（Viktor）をシュトラスブルクに招き、彼に司教学校（bischöfliche Schule）の指導を任せたことである（シュペヒト（F.A.Specht 1847-1908）は、これに当たったのは「司教エルヒェンバルト（Erchenbalt 958-971在職）」であり、エルヒェンバルト自らの役掌を含めてこの一連の人事を行っていたのは、ザンクト・ガレンの修道院であったと指摘している。このエルヒェンバルトはエンゲルの言うエルカンボルトと同一人物と思われる。F.A. Specht, *Geschichte des Unterrichtswesens in Deutschland von den ältesten Zeiten bis zur Mitte des dreizehnten Jahrhunderts.* 1885. S.189）。聖職者の後継を養成するという学校の目的は依然として変わっていない。教会での儀式のために教会用語や唱歌（賛美歌）の習熟が求められたが、そのために読み・書き・唱歌が第一に必要な教科とされた。それにもとづいてラテン語の文法がドナトゥスやアルクィンのテクストで教えられたが、その基本の習熟には相当に長い時間がかかり、規則、語句、フレーズの訓練で精一杯であったようである。説教や唱歌のために韻律の訓練が重視された。この学校は本来聖職者の後継を志す者を受け入れていたが、やがていくつかの学科を加え、７自由学芸（septem artes liberales）の開設を目指すまでになり、アーヘンの宗教会議（817年）の聖と俗の分離の指令によって、必ずしもそうではない者も入学してくるようになった。自由学芸の普及がその後押しをしたと考えられる。

ところで、11世紀のはじめには、司教は教会後継者の教育に力を注ぐことになる。そして、これが主流的な展開、つまり宗教改革時にまで継続し、やがて整理統合の過程で新しい学校を創り出すヨハネス・シュトゥルムの改革へとつながる長い道程を用意したのである。まず、ヴェルンヘル（Werinhar、あるいはWernher 1002-1027在職）、彼は神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒⅡ世の友人であり、彼は自ら創設したビザンチンの教会に、皇帝コンラドⅡ世に随行して訪ねたローマで、教

会関係だけではなく、古代ギリシアやローマの古典、ボエティウスによるユウクリッドの翻訳、キケロやクインティリアヌスなどの弁論家教育論をはじめ、音楽、修辞学、弁証法（論理学）などの書物を数多く蒐集して、これで自らの教会に図書室を用意した。その後継者の司教ヴィルヘルム（Wilhelm）のもとで教会の再編が行われた。その基本的な計画は、ひとつの司教座に教会や修道院を統合することで、これによって「修道士や修道女もひとつの聖堂（ドーム）のもとに住まう」ことになるというものであった。その傘下に統合される教会は、司教座教会（Stiftskirche）と呼ばれ、11世紀後半においては、大聖堂、聖トマス、新（jung）聖ペテロの3つの教会から構成されていた。そして、そのおのおのに基金（Kapitel）が置かれていた。それには学校（Stiftsschule）が附属していて、その管理には校長（magister scholastici）などと呼ばれていた役僧があたった。その教育は、聖職の遂行に必要なラテン語に翻訳された聖書の読み、それに唱歌が中心であった。そこでは、文法、修辞、弁証法のいわゆる三学を学ぶことが精一杯で、12世紀ルネサンスと呼ばれる精神運動の動向は、それを越えて新たな学問を目指そうという機運の醸成にまではほど遠かった。13世紀のはじめ、教皇庁は、学校設立のために聖職禄を賦与し、それによって将来の聖職者の確保に乗り出し、貧しい生徒には授業料無償の措置をとった。1215年のラテラノ公会議で、教皇インノケンティウスⅢ世は司教座教会の学校では文法の教授を、大聖堂教会の学校では神学の教授を授けるように指示していた。

しかしながら、13世紀後半のシュトラスブルクでは、他の諸都市と同様に、帝権（皇帝）と教権（教皇、司教）、さらにその教権とツンフト（ギルド）を主要勢力とする市参事会との緊張など、複雑なやりとりが展開された。ことに13世紀半ばから20年ほど続いた皇帝不在の時代、いわゆる「大空位」時代には、教権と市参事会のあいだで武力衝突がおきた。ことに、1262年に市側が司教側のハルデンベルク要塞を破壊したとき、新司教ヴァルター・フォン・ゲロルゼック（Walter von Geroldseck 1260-1263在職）はこれに激怒して、秘蹟授受禁止令（Interdikt）を発令し、管内すべての説教師に指示した。その結果、多くの学徒がシュトラスブルクを離れた。闘争の帰趨は、ヴァルター・フォン・ゲロルゼックの急死（1263年）によって、市参事会の行政権が確認されることで、翌年には一応の決着をみる。そのような不安定な政情を反映して、シュトラスブルクだけではなく、広くエルザス（アルザス）、そして帝国全土で学問への関心は急速に後退してゆく。シュトラスブルクには、その住民のキリスト教への寛容な感情をあてにして、多くのひとびとが流入してきた。ドミニコ会士、フランシスコ会士、アウグスティヌス会士、カルメル会士が腰を落ち着け、その教養、道徳的な誠実さ、習慣によって、彼らは際だった存在となってゆき、市民たちとの交流によって、シュトラスブルクの市民性におおきな影響を及ぼした。ドミニコ会は1170年にグツマンのドミニクスによって創設され、1216年には教皇ホノリウスⅢ世によって公認された托鉢修道会（Bettelorden）であるが、すでに1224年には司教ヴェリンゲンのハインリヒ（Heinrich von Veringen 1202-1223在職）によって、「説教僧団」（Predigermönche）として、シュトラスブルク

に招かれていた。修道院としての建物も移設や増築を繰り返し、町中に移ってからは教会も付設される。フランシスコ会はドミニコ会より少しばかり遅れてシュトラスブルクに姿を現したが、彼らは最初から町のなかに拠点を置き、都市の少数者、たとえばカプチン派、跣足修道士にも積極的に向き合った。このような托鉢修道会は、遅くとも中世のおわりころには、シュトラスブルクで学校（Klosterschulen）をもっていたことは確かである。修道院のなかには、清貧の人物が生活しており、豊かであっても無知なひとびとの模範となるはずであった。ドミニコ会はトマス・アクィナスをはじめ、多くの神学者を輩出したことで知られている。13世紀の30年代から40年代にかけて、アルベルトゥス・マグヌスはパリに赴くまえに、シュトラスブルクの説教師学校（Predigerschule）で10年ほど神学を教えていたことがあり、後にまたシュトラスブルクに戻っている。そのほか、後のキリスト教の深化におおきな思想的な影響をもつことになるマイスター・エックハルトやタウラーといった神秘主義の世界解釈で知られる学者たちも、その拠点を一時シュトラスブルクに置いたことがある。シュトラスブルクのドミニコ会士のなかでは、アルベルトゥス・マグヌスの弟子であるフルドライヒ（Huldreich）、多くの神学書を編纂したヨハネス・トイトニクス（Teutonicus）などがいた。

この托鉢修道会系の学校については、後にヴィンプフェリンクは、その著『ゲルマニア』で、これを女性名詞にして「建築士の訓練所」（gymnasia architectonica）に喩えている。その含意は、明らかにその教授内容と教授形態にある。塔のなかの螺旋階段をミネルヴァと思しき女性に導かれ、各フロアにある七学芸の部屋を巡り、やがて屋上の「神学」にたどり着くというお馴染みの図像はこれらの学校をモデルとしていたとみてよい。現に、これらの学校では、七学芸に止まらず、聖書を読み、公開討論を行っていたという報告もあり、エンゲルはある跣足修道士の「シュトラスブルクは大学（universitas）をもっていた」という証言を紹介している（Engel, op.cit. S.13）。これらの学校には、これが入学時に必ずしも母国語（日常語 Volkssprache）の使用を禁止していないこともあって、修道士やその志願者だけでなく、一般の市民も入り込んでいたと思われる。ザンクト・ガレンの修道院に現存する往時の図面（820-830年頃）によれば、すでにこの修道院の学校には修道士向けの内校と一般人向けの外校の区別の端緒が見られるが、シュトラスブルクの修道院にそのような区別があったかどうかはわからない。ドミニコ会が教育の改革、教科書の編纂に熱心であったことは十分に確認される。そのようななかから、ノルマンディー出身のアレクサンダー（Alexander de Villa Dei）によるラテン語の文法辞典『ドクトリナーレ』（*doctrinale*）が生み出された。要は、文法を基礎とし中心とした教授によって、「記憶」（Gedächtnis）の形成に多くを期待していたのであり、これには策（枝を束ねた「むち」）の使用も躊躇されなかったと言われる。

パリの大学（université）は13世紀の末には、神、学芸、法、医の４学部を有する学術の一大拠点であった。シュトラスブルクからも、ことに修道院の学校、司教座の学校から多くの学徒がパリを目指していた。14世紀の終わりには、ハイデルベルクやケルンなどに大学（Universitäten）が

創設され、シュトラスブルクからも多くの学徒がラインを下り、ネッカーを遡り、さらにまたラインを下り、各地へと向かった。教会や修道院は、奨学金の贈与や聖職禄の増強などの手当によって、大学の予備校と化しかねないこの事態に歯止めをかけようとしたが、当初からかなりの困難が予想された。司教座の学校も含め、この種の学校から大学へという接続の動向は、この時代においては制度的にはもちろん不確定なものであったが、後代のそれをみるとき、このような動向ははなはだ興味深い。

シュトラスブルクの司教座には、依然として、大聖堂（Münster)、聖トマス、新聖ペテロの 3 教会があったが、14世紀の終わりにラインの洪水で浸水したライヒェナウの聖ミカエル教会がシュトラスブルクの市内に移り、旧（alt）聖ペテロ教会として再出発することになり、市中で4番目の司教座教会の仲間ができた（Kollegialkirche)。これにともない、当然のこととして、これらには学校も付設された（Kollegialschule)。この状態は「宗教改革」の時代まで存続する。この司教座の学校は修道院の学校よりも低い目標を設定していたが、ひとびとはそれに満足していた。貧しいが才能のある子どもへの勉学の道も整備され、1308年、大聖堂の学校では、年に 6 名の特別枠（Laib Brot）を設けている。これらの学校が付属する教会には前代からの豊富な蔵書があり、そこから、大聖堂監督官のエレンハルト（Ellenhard-1304)、大聖堂の説教師で、アルザスやその近隣地域の年誌や統計書を著しているクローゼナー（Closener-1373)、さらに聖トマス教会の役僧で、学術基金担当のケーニヒスホーフェンのツヴィンガー（Zwinger）など、後代に名を遺す何人かの学者を輩出している。

この時代、つまり15世紀の前半までのシュトラスブルクの「教育制度」、というよりも教育のおおまかな形態、教育の存在と言ったほうが妥当かもしれないが、それはおおきく 3 つに区分される。私的な「教えの家」（Privatlehrhaus、ほとんどが教師の住居を兼ねた単級の学校)、学校（Schule)、そして大学（Universität）がそれである。そして、修道院や司教座諸教会の学校が生徒に教科課程に則った教授を行うまでには、さらに長い時間がかかった。

Ⅱ．学校改革の加速とGymnasium構想の出現

活版印刷術の発明が宗教改革の広がりにおおきな影響を与えたということは、よく知られている。しかしながら、それ以前に、神聖ローマ帝国に所縁の深いフランクフルト（アム・マイン）に近いライン河畔の町マインツで、15世紀の50年代に発明されたグーテンベルクの印刷術は、彼が最初に手がけた聖書（いわゆる42行聖書）にとどまらず、その直後から多くの書物が活版として世に出ていた。シュトラスブルクは、その「グーテンベルクが発明魂を発揮した町」でもある（「フェーヴル、マルタン『書物の出現』関根・長谷川・宮下・月村 訳．ちくま学芸文庫．1998．38ページ．

L.Febvre et H-J. Martin, *L'apparition du livre* 1971)。15世紀のうちに出版された活版本はインクナブラ（揺籃＜ゆりかご＞期の本）と言われているが、そのなかにはキリスト教フマニスム、あるいはキリスト教フマニストと呼ばれる一連のひとびと（humanismus Christianus）の著書も多くあった。その多くがバーゼルからフライブルク（ブライスガウ）、シュトラスブルクを経て、最終的にはオランダのロッテルダムへと至るライン河の流れに沿って産出されている。その最大の人物は、もちろんロッテルダム出身の「空飛ぶフマニスト」デシデリウス・エラスムスで、彼はことにロッテルダムからバーゼルまでの諸都市を巡り歩いて、多くの著作を残している。フライブルク（1457年）やバーゼル（1459年）に大学が創設され、小さな帝国都市シュレットシュタット（Schlettstadtフランス名セレスタSelestat、シュトラスブルクから南西に約40キロメートル、フライブルクからライン河を渡って北西に約40キロメートルの町）の都市学校は、ルードヴィヒ・ドリンゲンベルク（Ludwig Dringenberg 1410-1477）の指導のもと、名声を博していた。シュトラスブルクは、むしろ、これらの後塵を拝するかたちとなっていた。しかしながら、徐々に活気を取り戻した。「空っぽな学識こそ母なる都市シュトラスブルク、学問ある者や善なる者は継母に慰められる」というかつての風刺もすっかりと忘れてしまったかのように、とエンゲルも記している（Engel, op.cit. S. 21)。その動向は、ひとつはシュレットシュタットのドリンゲンベルクの学校の評判、さらにそのドリンゲンベルクも属していた「ヒエロニムス会」（Hieronymianerorden）の影響を確実に受けている。ウルガータ（ラテン語聖書）の編纂者の名を冠したこの会は、聖書解釈において、ギリシア文化のラテン語世界への導入をその活動の趣旨に置いていた。ドリンゲンベルクの学校の評判が陰りを示しかけたころ、シュトラスブルクでは、司教座教会と托鉢修道会との協調にヒビが入り始めた。教会幹部の無知と安逸さの反動として、学校は都市から講座、そしてさらに監督官まで受け入れ、その結果、かえって発展しているようにもみえた。

「はじめに」でも触れたカイザースベルクのヨハネス・ガイラーも、そのヒエロニムス会のひとりである。シュトラスブルクのギムナジウムの成立にとって重要な人物でもあるので、その経歴を簡略に紹介しておくことにする。「ABCの樹のもとの教師と生徒」と称される有名な木版画が冒頭に収められている『敬虔な教えと説教』（*Ein heylsame lere und predig* c.1490）の著者カイザースベルクのヨハネス・ガイラーは、北でヴュルテンベルク侯国と国境を接するスイスのラインの滝の町シャフハウゼンに生まれた。父親は市の公証人助手、のちに市の書記となった。父の横死後、オーバー・エルザスのカイザースベルク（Kaisersberg）に近いアンマーヴァイラーで育った。ガイラーは、創立間もない1460年に、フライブルク（ブライスガウ）の大学に学び、やがて当地で哲学を教え、そして司祭叙任を受けた。1471年には、バーゼルの大学へ赴き、神学を修め、1475年には神学の学位（Magister）を得た。翌（1476）年にはフライブルクへ戻り、教養学部（facultas artis liberalis）の講師（Dozent）となり、1478年にはシュトラスブルクの大聖堂、1486年には聖母教会の司教となった。彼は、自然の母国語（中高ドイツ語）で、堅実に、しかもユーモアたっぷ

りに説教したといわれている。彼自身は敬虔なスコラの学者であったが、教会の内部改革を目指し、その現状、ことに司祭や修道士たちの俗化や非行に対して容赦の無い批判を行った。とはいうものの、メランヒトンの大叔父で有名な人文主義者ロイヒリンなどとの親交もあった。彼の説教と著作は、宗教改革以前の説教の歴史にとって重要な意味をもっているとされる（Fr. X. Zacher, *Geiler von Kaisersberg als Pädagog* 1913-14）が、その没後まもなく、教え子でもあったヴィンプフェリンクの吹聴によって、その存在が注目されるようになった。

ガイラーが関係していたシュトラスブルクの司教座は、若者たちに大学へ行くことを促進させる方策をとったが、それに応じたのはあまり豊かではない者たちであった。都市の参事会員など裕福な者（「都市貴族」）の子弟は都市の学校（司教座の諸学校、修道院の学校など）で満足し、大学に向かう者には比較的貧しい者が多かった。そして、この時期、そのような都市の学校ですら、貧しい生徒が多かった。ここで、有名な『トマス・プラッターの手記』（1572年）が想起されてもよいであろう。若干時代が前後するが、ルターに悔悛を迫ったウォルムスの帝国議会が開かれた年（1521年）、スイスの山羊番の少年だったトマス・プラッターが勉学を志し、向かったのがシュトラスブルクであり、シュレットシュタットであった。「（たまたま出会った連れに誘われて）シュトラスブルクにいってみると、貧しい学生でいっぱいで、学校もよくなかった。しかし、シュレットシュタットにはよい学校があるという。」（『放浪学生プラッターの手記』阿部謹也 訳、40ページ）

このようにして、大学はもちろん、都市の学校も貧しい学徒で溢れていた。教育史上評判の悪い「遍歴学生」（kurrender Schüler）の出現もこのような文脈でみておく必要がある。

このような状況に対して、ガイラーは、市当局に、生徒を激励し、四旬節の期間は説教師のもとに住まわせることを求めた。しかしながら、これがうまくゆかないとみるや、司教座の役僧に子どもを教師（Schulmeister）のもとに出頭させることを義務づけるよう提案した。聖トマス教会の役僧シュテファン・フォン・ウーテンハイム（Stephan v. Utenheim）は1502年、その対策として５金グルデンの基金を教会に創設した。多くの書物が市場に溢れ、学校や大学はフマニスムの影響で改革を迫られていたが、16世紀が始まっても、シュトラスブルクでは、ガイラーの苦労はなかなか実らなかった。司教座の学校では依然として旧来の教育が行われていた。さらに、シュテファン基金で高等学校（Hohe Schule）に改編しようとする努力も挫折したので、ガイラーは別の手立てを考えなければならなかった。1500年にたまたま市書記のポストが空いたのを機会に、市参事会の有力者バッハトルト・オッフェンブルク（Bachtold Offenburg）に、シュトラスブルクの出身で当時バーゼル（大学）で講義をしていたセバスティアン・ブラントを推薦した。市の書記としてのブラントがシュトラスブルクで講義をしたり、市民の精神的な向上に尽力したという形跡は見当たらない。しかしながら、ブラントは、教育についての著作を多く遺した。それは本来、彼の息子の教育のための著述であったが、後代になって出版された。『痴愚神礼賛』（エラスムス）の先駆とされるドイツ語の風刺作品『阿呆船』（*Narrenschiff,* 1494）などの著書もあるブラントであるが、

教育に関する2巻の書物については、これを受け取ったルターによって、意外にも神の恩寵とされた。その第1部がカトーやイソップの寓話をドイツ語に翻訳したもの、第2部が他の詩人や逸話(「アネクドート」)の道徳的な内容、哲学的な文章であった。

ヴィンプフェリンクはシュレットシュタットの出身、当地のドリンゲンベルクの学校に学び、フライブルク（ブライスガウ）でガイラーの教えを受け、これが彼の後半生を決定づけた。ハイデルベルクで詩学と修辞学の教授を3年ほど務めたあと、50才を過ぎてから、シュトラスブルクへとやってきた。若干の中断はあったが、1515年に郷里のシュレットシュタットに戻るまで、文筆家としてこの町に滞在した。彼は、南ドイツのフマニスムの代表者とされている。「はじめに」にでも触れた代表作の『ゲルマニア』は、国民ドイツ史の基礎を築いたものとして評価されている（1501年刊行、「はじめに」で触れたラインの事典に収められたH.Höhnk, Jakob Wimpfeling では、1505年とされている)。ここでは、その『ゲルマニア』のなかのギムナジウムについての提案を中心にみてゆくことにする。

ヴィンプフェリンクは、シュトラスブルクで、自身でも多くの弟子を引き受けた。そのうちで、最も著名なのは、都市シュトラスブルクのシュテットマイスターとなったヤコブ・シュトゥルムであった。シュトラスブルクに到着後まもなく、ヴィンプフェリンクは、ガイラーが無駄に終わった学校の設立を促進すべきであるとの内容を含む文書をまとめた。この請願は、『ゲルマニア』の第2部を成しており、これを、ヴィンプフェリンクは司教や司教座ではなく市参事会にも宛てた。教育を独占してきた教会やその関係機関を巧妙に避けたというべきである。青少年の育成が、自らの郷里であるシュレットシュタットをはじめ、いくつかの都市ですでに世俗の機関に帰属していることを、ヴィンプフェリンクは十分に承知していたのである。「はじめに」で紹介したパウルゼンは、それに続いて、ヴィンプフェリンクの「提案」を、次のように整理している（Paulsen, ebenda)。「(ヴィンプフェリンクは）その施設（Gymnasium）の必要性を二重の根拠によって申し立てている。第一は、青少年を大学へ進ませるためのよりよい準備には、そのような施設が必要であるということ。少年たちはあまりにも早くから、満足に言葉の知識もないうちに大学にやってくる。ここで時間が無駄に失われている。さらに、学問に向かない少年たちを長期にわたって、また広範囲にわたって教授することを求めた結果、彼らは遊び半分で自堕落に時間を浪費することになってしまう」。パウルゼンは、この箇所の出典をエンゲルに委ねている。エンゲルの該当箇所を見てみる(Engel, op.cit. S.31)。エンゲルは、『ゲルマニア』の（エルンスト・マルティン Ernst Martin による）ドイツ語訳を用いていると断っていることから、これが本来はラテン語で書かれたことがわかる（1648年にモシャロッシュ Moscherosch 1611-1669によって "*Tutsland*" という標題で刊行された記録がある)。「最初の文字綴りもほとんどできないとすれば、諸氏のご子息が子どもの時期のきわめて早いときから学校に拘束されていることはけっしてよいことではないでしょう。5年、いや少なくとも3年でも自由学芸の習得のためにギムナジウム（Gymnasium）に送ったほうがよ

い。それは、諸氏の都市でも設立が可能なのです。そして、それは、そのための建物を都合することだけを除けば、すべての経費は地元で賄える。ご子息が、自分の祖国、自分の血族のなかで、高等の学校、たぶんローマに向けて、短期に、しかも有用な教育の用意がなされることはさらによいことでしょう。彼らは、やがて聖職に就き、そして都市で書記や公証人といった役人のポストを手に入れたり、あるいは外国で商業に従事し、あるいは枢機卿のもとで働き、ついには重要な商議に立ち会うことにもなるでしょう」。これがパウルゼンによる整理の第一の内容に該当している。その第二は、以下の通りである。「そして、それは、両親や親族などのもとで万事大目に見られて、鷹狩りや道楽に現（うつつ）を抜かし、遊興、怠惰、髪を縮らせ、好ましくない交友に走り、自らを徹底的に堕落させてしまうことに比べれば、はるかによいことでしょう」（zit. nach Engel, ebenda）。ヴィンプフェリンクが、ここでギムナジウム（Gymnasium）をいわば普通名詞的に用いたことによって、シュトラスブルクにやがて設立が予定される新しい学校の方向だけは曲がりなりにも定まったと言ってもよい。1538年の秋に開校されたヨハネス・シュトゥルムの学校は、Gymnasium Argentinesse（シュトラスブルクのギムナジウム）と呼称されたからである。ちなみに、Argentinesseの名詞Argentoratumは、ケルト＝ガリア時代のArgentorate「水の要塞」といったほどの意味で、ローマ人入植後のシュトラスブルクを指すラテン語である（内田、前掲書、32-36ページ）。

しかしながら、この時点、つまり1501年の段階では、その展望ははなはだ不確実なものに止まっていた。ヴィンプフェリンクが創設を提案したGymnasiumは、下からの積み上げ方式の学校ではなく、ラテン語学校と大学との中間の段階にあった。これは、司教座の学校と仲違いしないように配慮されたものと思われる。というのも、彼は、「この計画はけっして誰かに損害を与えるようなものではありません。もちろん、学校教師にとっても有用で、しかも誰とでも親善が図られています」と述べていた。結局のところ、この学校は、必ずしもすべての子どもを受け入れるものではなく、「すでに他の学校に通っていたものの、もはやそこには行かなくなって、自堕落な生活を送っているか、親類などからの多額の資金援助を受けて他の都市の学校に入る、あるいはきわめて早期に高等な学校に入る、そういう子どもたちを相手にしています。早期に高等な学校に入った子どもは、いきなりアリストテレスの哲学と帝国法などを聴かされ、落ち着きのない生涯を送ることになります。彼らは、教養の出発点を持ちえず、ラテンの教養が何たるかを会得できなかったため、有識なひとびとのまえで怖れをなして話ができなくなってしまいます。このようなことからも、大聖堂や司教座の学校にとっても、新たに構想されるギムナジウムはけっして害を及ぼすものではありえないのです」（zit.nach Engel, S.32）。この構想がシュトラスブルクの有力者、とくに多くの学識ある会員を擁する市参事会への説明と説得は困難をきわめた。というよりも、不成功に終わった。ヴィンプフェリンクは、その書物で12金グルデンの報酬を得た。しかしながら、その熱心な請願は実現しなかった。ヴィンプフェリンクは、友人への手紙にも記しているように、その背後に跣足修

道士トマス・ムルナー（Thomas Murner 1475-1537）の姿を感じ取っていた（Engel, ebenda)。しかしながら、ムルナーを捉えていたのは、その設立にかかる費用の問題で、これをどう調達するかということであった。ムルナーが考えていたのは、後に着手されたのがそれであったことから判断すれば、大聖堂の学校（Domschule）の改良であった。

フマニストたちがいくつかの学校に活路を見出したのは、新聖ペテロ基金がヴィンプフェリンクの教え子でハイデルベルク出身のヨハン・ガリナリウス（Johann Gallinarius 1475-？）を雇用し、彼がそこで文法と修辞学を教えたことによる。さらに、エルザス（アルザス）人のフマニスト、マティアス・リンクマン（Matthias Ringmann 1481-1511）はコルマール（Colmar）での短期滞在から戻ったとき、市参事会がガイラーやヴィンプフェリンクの提案に対して無為に打ち過ごしているのに接して、自ら自分の学校（Privatschule）を開いた。彼が最初にシュトラスブルクに滞在したとき、すでにイタリアから戻っていたトマス・ヴォルフ（Thomas Wolf 1450-1511)、そしてヤコブ・シュトゥルム、さらに先述のヨハン・ガリナリウスなどとも親交を結び、一団のヴィンプフェリンク擁護グループをつくっていたのである。 しかし、リンクマンは、わずか2年ほどでシュトラスブルクを去っていった。ガイラーは、ヴィンプフェリンクのグループと協力して教授改革の担い手となってくれる人物を探した。その結果、自分と同郷（カイザースベルク）で、シュレットシュタットの学校でクラト・ホフマン（Crato Hofmann）の後任を努めていたヒエロニムス・ゲープヴィラー（Hieronymus Gebwiler 1480-1545）がシュトラスブルクに招かれた。ゲープヴィラーは15年間もシュトラスブルクの大聖堂の学校の主任として勤務した。「シュトラスブルクの教会の最も高貴な学校管理者」（nobilissimae Argentinae ecclesiae ludi literarii praefectus）と呼ばれた彼はヴィンプフェリンクと緊密な関係をもっていて、自らの学校をヴィンプフェリンクの計画に従って、ギムナジウム（Gymnasium）へと内面的に改編するための努力をした。ドイツ語の語形論、語源論、統語論、詩句論などを講義し、それと並んで書き方の訓練、話の書き取り、手紙、詩作など、さらに弁証法、最終的には自然の学問と道徳論の基本が最も適当な内容と階梯とされた。講義では、ラテン語のテクストは排除されなかったが、ゲープヴィラー自らドイツ語に訳したホラティウスの書簡集などが用いられた。ヨハン・コシュリュ（Johann Cochleus 1479-1552）が1511年にニュルンベルクの学校のためにまとめたラテン語文法も使った。ゲープヴィラーの教え子で彼の助手をしていたゲオルク・アルテンハイマー（Georg Altenhaymer）は語彙の説明のための小辞典を刊行したが、これはコシュリュのアイディアに先行していたと、エンゲルは言う（Engel, S.37)。ギリシア語の教師としては、当地シュトラスブルク出身で、ガイラーの庇護を受け、ヴィンプフェリンクに教えを受けたオットマール・ナハティガル（Ottomar Nachtigall、ラテン語名：オットマリウス・ルスキニウス（Ottomarius Luscinius 1478/80-1537）が諸国の遊学を終えて、16年ぶりに郷里に帰ってきたとき、聖トマス基金が彼を採用した。1514年エラスムスがシュトラスブルクを訪ねてきたおり、市参事会主催の晩餐会で歓迎

の挨拶をしたのは、このナハティガルであった。

Ⅲ．学校改革の旋回

前史とでも言うべき追跡にだいぶ紙幅を費やしてしまったが、これから、宗教改革期、つまり1517年のルターの「九十五箇条」の提題から1538年の学校の開設までを叙述する時点にまでたどりついた。すでに「はじめに」でおおまかな動向は記したが、ガイラーやヴィンプフェリンクに連なるキリスト教に基礎を置くフマニストたちにとっては、はなはだ穏やかではない事態が到来した。前節の終わりに触れたナハティガル（ルスキニウス）はギリシアの神々をシュトラスブルクの市民に教えていたが、教会革新の暴力的な動きに動揺して、1523年故郷を離れ、流浪の旅に身を任せた。1524年の動きについては、すでにⅠ．のはじめに触れた。この年の喜捨条令（Almosenordnung）が「シュトラスブルクの４つの学校の生徒100名は、家々のまえで歌い、また物乞いをしてはならない」という1501年以来の警告を繰り返していただけであるとしても、教育史にとっては、1523年の時点で、いまだ４つの司教座学校が存在していたことが重要である。それだけに、状況の変化は突如やってきたと言ってよい。シュトラスブルクを去る直前のゲープヴィラーは、こう嘆いている。「修道院は空っぽになった。跣足修道士の管理人は『若者は学ぼうともしない、ただ遊び惚け、飲んで、食って、だからと言って手職を求めるためのことなど何も知ろうとはしない』と言っている」（zit. nach Engel S.42）。司教座の主だった者たちは、ある者は宗教改革に身を投じ、またある者は、例えば先述のナハティガルのように、そこから離れていった。跣足修道士のような一部の者たちは、さらに何年かはその哀れな状態をひきずったが、やがてその身分は市参事会の管理のもとに置かれた。こうして、学校と教会の「世俗化」は、1524年以降、併行して急速に進んだ。ルターの『キリスト教学校の設立と維持に関するドイツ都市参事会への書簡』（*An die Radherrn aller Stedte deutsches Landes datz sie Christlichen Schulen aufrichten vnd halten sollen*）が公表されたのも、この1524年であった。1517年以降の学校改革に関する対応で遅れ気味であったシュトラスブルクは、1524年１月の「クーデター」で完全にそれに追いついた格好であった。

その翌月の1524年の２月には、新たな学校の設立に向けた請願の文書がツォルン（Zorn）、ヤコブ・シュトゥルム、リンデンフェルス（Lindenfels）、ゲルボット（Gerbott）によって構成される委員会にすでに届けられていた。その内容は、「市民は長いあいだ、教えの家などだけではぐらかされてきた」として、市参事会によって任命された３人の委員のほかに、施設の設立と管理、それに教師の任用のために聖職者の委員を加えること、男子の民衆学校を６校、女子の民衆学校も６校が設立されること、４つの司教座学校を学識豊かで、敬虔な人士で、とりあえず教師１名と助教１名で再開することなどを求めている。1524年の９月にも、説教師たちが市参事会に対して、学校の

設立を求めた請願を提出している。3人委員会は、これらの提案に誠実に対応したようで、1524年末から1525年にかけて亡命している司教座の幹部と秘かに交渉した形跡もあるが、なかなか溝は埋まらなかった。1525年に入って、ふたつのラテン語学校の設立準備にまで漕ぎ着けた。ひとつは跣足修道士による学校、もうひとつは聖母教会同胞団による学校で、これで当座を凌ごうというものであった。1526年の会議で、聖母同胞団はその広間を譲り渡すことに慎重であったが、聖トマス基金はその依存が宗教改革の側に向いていたため、市参事会に任せた。こうして、結局のところ、その膠着状態の結果は、民間の学校、つまり「塾」のようなものが叢生するという予想外の事態を生んだだけであった。修道院から出てきた修道士が生活のためにラテン語教授を始めたのである。そのうち、よく知られているのが、シュトラスブルクの大聖堂の司祭代理オーベレンハイム（Oberenheim）の助任司祭だったルカス・ハックフルト（Lucas Hackfurt）の学校とオットー・ブルンフェルス（Otto Brunfels 1488-1534）の学校であった。ことに、活版印刷術生誕の地マインツ出身のブルンフェルスは、故郷の大聖堂学校に学んで、各地を転々とし、シュトラスブルクに来た1520年ころには、すでに町の外に移っていた修道会に出入りしていたが、やがて宗教改革の運動にはっきりと傾斜していった。フルダの近郊シュタインハイム、さらにはノイエンブルク（ブライスガウ）で説教師に就いたあと、1524年に再びシュトラスブルクにやって来て、その市民となった。彼の学校にはおおぜいの生徒が殺到し、そのために助手を探し回らなければならないほどであった。採用された助手のシュヴェーベル（Schwebel 1490-c.1540）は、ラテン語テクストのドイツ語訳も引き受けていた。ブルンフェルスは、教師の職務をただ生徒の教授に励むことに限らず、学校の内外でその上品な行為を心がけるように諭している。ブルンフェルスはある友人への手紙で、改革派に傾斜したシュトラスブルクの都市や地方組織が福音派の牧師を派遣してくれるように参事会に請願していることを紹介している（Engel, op.cit. S.46)。その動きに対して、市当局は1528年、決定的な対策を打ち出した。参事会が学識経験者と学校の責任者をメンバーとする新たな委員会を設置すること、そして教育制度を教会当局から引き離し、世俗の機関のもとに秩序づけることが、その骨子であった。その委員会は、ヤコブ・シュトゥルム、クラウス・クニーブス（Klaus Kniebs)、そしてヤコブ・マイヤー（Jakob Meyer）であった。それにふたりの説教師が学校監督のために加わった。彼らは、巡察官（Visitatores）と呼ばれた。

これからの動向を先取りしておくと、このなかでは、ヴィンプフェリンクの教え子でもあるヤコブ・シュトゥルムの存在が注目される。彼の主要な関心は、やはりラテン語学校に向けられていた。すでに、ハックフルトの施設は閉じられ、ブルンフェルスは多くの生徒の教授に手一杯であった。その助手で将来を嘱望されていたシュヴェーベルは若い妻を亡くし、傷心のままシュトラスブルクを去っていた。宗教改革の動揺のさなかにシュトラスブルクを去ったゲープヴィラーの後任として、1525年、ヨハン・ヴィッツ（Johann Witz、別名サピドゥスSapidus 1485-1561）が旧大聖堂の学校の主任に任命され、別名のほうで有名なこのヴィンプフェリンクの甥は、クインティリアヌスに

始まり、エラスムスを意識した新しいフマニスムの教授法の導入を通して、ラテン語学校の復興に力を尽くし、一時、彼の生徒は900名を数えた。学校委員会があらためてふたつのラテン語学校を開設し、ブルンフェルスとサピドゥスをその校長に任命した。サピドゥスの学校は、どちらかと言うと、説教師やドミニコ会系、ブルンフェルスの学校はカルメル系であった。サピドゥスが一時シュトラスブルクを去らざるをえなかったのは、「衆会、食卓、街頭、神殿などでの真の信仰の擁護」(Beatus Rhenanus an Zwingli, zit. nach Engel, S.47) であった。教え子を祈祷させるのに熱心でなかったとか、あるいは食卓での言行に品位を欠いたとか、非難の声があがっていた。これで晩年の伯父ヴィンプフェリンクとの関係も具合が悪くなってしまったと思われる。ヴィンプフェリンクは、そこに再洗礼派の動きを鋭く見たのかも知れない。ちなみに、シュトラスブルクはすでに参事会の巧妙な対応によって農民戦争の災禍を逃れている。ブルンフェルスは、妻の浪費癖がひとびとの怒りを惹き起こしたこともあって、続く時期は著作に専念した。ブルンフェルスは学校での授業から関心を逸らし、それをいろいろなひとびとに任せて、植物学などの研究に没頭し、その成果は1532年にバーゼル大学からドクトルの称号を授与され、翌年の夏にはスイスのベルンの町から医師として迎えられるまでになった。教会の学校監督者からも、ブルンフェルスが学校経営を等閑にしているとの指摘もあった。ブルンフェルスは多くの著作をシュトラスブルクで書き上げ、その多くは市の有力者に献じられ、また生徒たちにも多くのテクストを残した。キケロ、クインティリアヌス、プルターク、アグリコラ、エラスムス、メランヒトンから抜粋した提言集が知られている。

1530年当時のシュトラスブルクの学校は、サピドゥスとブルンフェルスに由来し、その後任として、それぞれブルンフェルスの後任としてバーゼルから来任した医者のペーテル・ダジポディウス (Peter Dasypodius 1490-1559) とシュヴェーベルによって運営されているふたつのラテン語学校、説教師修道院 (Predigerkloster、ドミニコ会の修道院) での講義、それに聖トマスの神学講義であった。ダジポディウスに白羽の矢を立てたのはブッツアーであった。彼はラウラーに書簡を送って、「シュトラスブルクの両方の学校はこれまであまりよい状態にはなかった」として、急ぎダジポディウスの採用をヤコブ・シュトゥルムに薦めるよう求めた。「このような人物を取り逃がすことになると、教育制度すべてが危機に陥る」(zit. nach Engel, SS.54f.)。1535年の 4 月 1 日の学校委員会で、「すべての学校とその教師は4年毎に学校委員会に召喚され、各自の希望を申述することは許されるが、学校に寄せられた苦情などにも耳を傾け、改善を期待しなくてはならない」(zit. nach Engel, S.64. Anhang Ⅰ) とする決定がなされた。この会議の決定は、さらに、「より上級の学校、ラテン語学校、教えの家も含めて、これらのすべての学校は学校委員会の管轄のもとに置かれる」と規定していた。その学校は、「ただ単に、子どもに読み書きを教えるだけでなく、神を敬い、キリスト教徒としての躾をうけ、善良な市民として道徳的に教育されなければならない」(zit. nach Engel, SS.54f.) ものであった。一方、世俗当局による民衆教育の整備は、いまだほとんど手着かずのままであった。

Ⅳ．学校改革の落着とGymnasiumの設立

1535年の７月、第三のラテン語学校が旧聖ペテロ教会のそばに開校し、アンドレアス・ツェッフリウス（Andreas Zechlius）が「キリスト教による訓育とラテン語教授」のために任用された。1537年３月の「巡察結果」は、既存のふたつのラテン語学校に対照的な評価を行っていた。かつて130名を超える生徒を擁していたブルンフェルス由来の学校も、この時点ではその半分を数えるまでに落ち込んでいた。助手のシュヴィーベルも何人かの生徒を連れて、そこを去っていた。その一方で、ダジポディウスの学校の評判はよかった。第三の学校が設立された背景には、このような事情もあったのである。1536年、つまり設立の翌年の８月、かつてブルンフェルスのもとで助手をしていたシュヴェーベルが、この学校の代表に就任した。その翌年の７月には、45名の生徒、13名の弟子（commensalis、食卓仲間）が在籍していた。シュヴェーベルが市当局に宛てた報告が聖トマス教会の文書館に残っているとして、エンゲルがその紹介をしている（Engel, S.57f.）。それによると、10時から12時は食事のための帰宅が許されているほかは、朝の６時から夕方の４時半まで、その後は14時半まで授業であった。ただ、木曜日は祈祷や唱歌に充当され、日曜日も講堂への参集が求められ、その後は教会に祈祷に出かけた。生徒だけでなく、教師にも相当タイトなスケジュールが組まれていた。クラスはラテン語の習熟度に応じて３クラスに分けられていた。下級ではドイツ語訳を用いてラテン語の語彙習得が目指され、中級ではドナトゥスの文典によってラテン語の文法が教授される。上級では文法に習熟するとともに、統辞法、詩句論の学習が行われたが、そのテクストにはヴェルギリウス、エラスムス、サルスティウスなどが用いられた。この学校では、教育内容はラテン語に限定されていて、ギリシア語や自由学芸、あるいは自然、歴史や地理などには手を伸ばしていなかった。宗教改革の運動のもとでは、ことにギリシア語の学習は生徒の自由意志に委ねられていて、あえて必須とはされていなかったのである。さらに、宗教的、道徳的な心情の陶冶は、ほとんど配慮されていなかった。

このような状況において新たな教育の力が求められたのであるが、それに応えるべくシュトラスブルクに招かれたのが、「はじめに」でも述べたように、かのヨハネス・シュトゥルムであった。リュティヒ（Lüttich、今日ではベルギーの都市リェージュ）でヒエロニムス派の古典語教育を受け、ロェーヴェン（Loewen、これも今日ではベルギーの都市ルーヴェン）、さらに1529年以降パリで研鑽を積み、この間にブッツアーとの文通があった。ヨハネス・シュトゥルムがシュトラスブルクにやってきたのは1537年１月14日であるが、その当初からギムナジウムの創設やその指導のために招かれたのではない。そのような任務には、すでに多くの学識経験者が関わっていた。ヨハネス・シュトゥルムは、説教者学院Collegium Praedicatorumの教授Professorとして任用されたのであった。彼はラテン語学・ラテン文学の学識に熟達しており、学生だけでなく、説教師や都市の

名望家も聴講に訪れ、その講義は聴衆の注目を浴びた。当時の俸給も判っているが、ルターの町ヴィッテンベルクやエラスムスの町バーゼルからの招聘話が伝わると、年俸100グルデンからまもなく150グルデンに、さらに4年間シュトラスブルクに留まるという条件で140グルデンがシュトラスブルクの学校委員会から支給された。

1537年、ヨハネス・シュトゥルムに、ラテン語学校の巡察が命ぜられた。その報告（zit. nach Engel, S.60）には、「ラテン語学校をひとつに統合することは、すでにいろいろな場所で多くのことが着手されていますが、それよりもはるかに優れた結果をもたらすはずです。私は、（オランダの）ツヴォーレ（Zwolle)、デフェンテル（Deventer)、ライデン（Leyden）在のヒエロニムス派の学校で、その事例を見てきました」と記されていた。ここでは、シュトラスブルクに来る直前まで滞在し、後に明らかにモデルとするロェーヴェンの名をこの時点であえて出していないことも注目される。さらに「これらの学校は8クラス（年級)、下級の3クラスと上級の6クラスです。下級のクラスにはそれぞれ1名の教師が、上級のクラスには教科毎の多様な教師が配置されています。校長はそれらを管理します」と報告されていた。また、テクスト、生徒の分団（Decrien、10名単位)、学習の進行を促すための賞罰などが紹介されていた。しかしながら、より重要な問題は、シュトラスブルクに現存する学校をどのように位置づけ直すかであった。サピドゥス系の生徒は3つに分け、そこから8（octava)、7（septima)、5（quinta）を、シュヴェーベル系の生徒も3つに分け、そこから8、7、6（sexta)、そしてダジポディウス系の生徒は4（quarta)、3（tertia）に分けられた。8クラスには神学を学んでいる学生が配属された（今日のギムナジウムの降順による年級名とは逆で、この場合は昇順による呼称が用いられていた)。これらの報告は、市の学校委員会のメンバーに深い印象を与えた。長いあいだ求めてきた目標が眼前に近づいてきたと思われ、さらに一歩踏み出すのに何の躊躇もなかった。これまでの長い道程を振り返るとき、その結末はまことにあっけないほどの展開であった。かくして、1538年2月24日、「ヨハネス・シュトゥルムの提案」として、その名を明記した議案が、学校委員会の議定書として承認された。その「提案」はラテン語によるもので、その始まりは、こうなっている（zit. nach Engel, Anhang Ⅲ）。「文芸の学校を、ひとつの場所に統合するほうことのほうが、ばらばらに分散しているよりもはるかに有用である」(Ludos literarum uno loco comprehendi utilius est quam varie distrahi.)。この提案は、シュテットマイスターのヤコブ・シュトゥルムによって、その実施のための確認を得た（梅根悟監修「世界教育史大系」の第24巻『中等教育史Ⅰ』講談社1975のなかで、長尾十三二がG. Merz, *Das Schulwesen der deutschen Reformation im 16. Jahrhundert,* 1901などを駆使して、簡明な記述を行っている。77ページ)。そして、早くもその3日後の2月27には、修道院管理者から、創設されるべきギムナジウムのために、すでにドミニコ会から手放されていた説教師修道院をすべて学校委員会に譲り渡すことが決まった。3月の最初の日、市参事会はこれを裁可し、この歴史的な大事業はいよいよ実行に移されることになった。

学校の組織については、ヨハネス・シュトゥルムの提案が採用された。ギムナジウムは3つの段階（あるいは部門）から構成された。まず、アルファベタリ（alphabetari）と呼ばれる予備学校（Vorschule)、そしていわば本来のギムナジムで6クラス（年級、1クラスを最上級とする降順の配列)、3つのラテン語学校の生徒から構成された。それに、文芸および神学が講義される上級。これまでの教師たちは、ギムナジウムに再雇用された。ダジポディウスは1クラス、シモン・リトニウス（Simon Lithonius）は2クラス、サピドゥスは3クラス、シュヴェーベルは4クラス、ペーター・シュリースハイマー（Peter Schriessheimer）は5クラス、ヤコブ・シェーラー（Jakob Scherer）は6クラスの担任が、それぞれ予定された。そうこうするうちに、説教師修道院（ドミニコ会系修道院）で必要な建築工事が始まった。しかしながら、学校委員会は、聖ミカエルの日（10月28日）までに工事の終了が困難であると判断し、9月7日、急遽、跣足修道院を改築することを決め、そこでギムナジウムを暫定的に開校することにした。アルファベットの予備課程は、ヨハネス・シュトゥルムが「提案」で示していたように、従来の教室で授業を行うことにした。ギムナジウムの開校は、聖ミカエルの日、10月28日であった。その前日に、ギルドの団体に属する市民たちに、参事会名で、市の陪席判事（Schöffe）から、「子どもにラテン語や学芸を習得させようと思っている者たちは、明日は所定の場所に子どもを送らなくてはならない。また、少年たちが短時間のうちに街路を通りながら、いっしょにラテン語やその他の学芸を学ぶことに前もって配慮し、くれぐれもそれに不平など言わないように」との通達が発せられた。その教育計画（カリキュラム）は、すでにヨハネス・シュトゥルムの「提案」に付表として示されている（Engel, op. cit. S.71, Anhang Ⅲ）が、それはラテン語の習得（文法、修辞法など）と活用（読解、作文、朗読など）を基軸として、4級（最下級からは5級）ではキケロやカエサルの例文集と併行してギリシアの学習が加わり、2クラス（最下級からは7級）ではアリストテレスやプラトンのほか、数学も学習されるというものであった。その趣旨は、古典古代の教養を福音主義に、つまり賢明と雄弁によって敬虔を（sapiens et eloquens pietas）用意することにあったのである。

こうして、シュトラスブルクのギムナジウムは跣足修道院を仮校舎として、10月28日に開校した。翌1539年にかけて新築された説教師修道院の本校舎に移転し、ラインを渡る川風も冷たく、いまだ春なお浅き復活祭に、本格的な開校を祝う式典が盛大に行われた。

おわりに

現代イタリアのルネサンス史家エウジェニオ・ガレンが簡潔な紹介のあと、こうまとめている。「シュトゥルムの教育課程においては、ラテン語（ついでギリシア語）の文法や文章論の教授内容も、逐次読まるべき著作家や作品も、その内容の難易にしたがって、きわめて適切に配置されてい

る。そのおかげで、この教育課程は教授法に関する助言や示唆にいたるまで、正鵠をえた賢明なものとなっている。プロテスタント圏におけるヒューマニズム教育は、シュトラスブルクにおいておそらくその最も調和せる姿で実現されていた」(Eugenio Garin, *L' educazione in Europa*, 1957.『ヨーロッパの教育』近藤恒一訳 1973 サイマル出版会 219ページ)。 たしかに、その到達点だけをみれば、ガレンの評価は、これ以上の付言を許さない、それこそ正鵠を得たものであろう。しかしながら、この省察の目的は、ヨハネス・シュトゥルム自身やできあがったシュトラスブルクのギムナジウムを賞賛することではなく、その創設の事情について、その経過をたどることによって、その教育史的な意味を考えることにあった。

そして、その経過をたどることを通して、第一に確認されたことは、シュトラスブルクのギムナジウムが宗教改革の産物であるというような単純なものではないということである。ただ単純に、ヨハネス・シュトゥルムが4つの教会の学校を統合してひとつのギムナジウムを創ったということは、必ずしも正確とは言えない。その最終局面においては宗教改革の影響を無視することはできない。ことに、ラテン語学校のオーナーやパトロンである教会や修道院の物質的な解体は、その維持におおきな打撃をもたらした。しかしながら、学校は姿や形を変えながら、乱世を生きながらえてきた。シュトラスブルクの宗教改革の受け止め方がたしかに「市当局が宗教改革運動を取り込んでしまう」であったことは事実として否定のしようはないものの、学校では依然として旧来の教育内容がおおまかには維持されていたこともまた事実なのである。この事実の継起をどう解釈したらよいのか、ここでは聖界はもとより俗界（都市市民）にとっても絶対的に必要な「教養」の世界があったとだけ指摘しておく。古典古代の教養こそ、ときに強弱の違いはあるものの、今日に至るまで通用するヨーロッパの普遍的な文化価値であると認識しておくことが必要である。

そして、第二には、例えばヨハネス・シュトゥルムのような人物、これをフマニストと言うとき、それを思想的に反カトリックでひと括りにしてしまうことの危うさである。ヨハネス・シュトゥルムへの思想的な系譜はおそらくシャルトル学派の理性と信仰の調和にまでは確実に遡れるが、それは時代がほぼ重なるエラスムスやメランヒトンらのキリスト教フマニストも同様である。その直前に位置しているヴィンプフェリンクやガイラーといったキリスト教フマニストがエラスムスと同じ系列に属していることは、その交友関係からも明白である。彼らにとって、フマニスムは神学、ことに聖書研究へのスタンスなのであった。15世紀のはじめコンスタンツでの公会議のおりにザンクト・ガレンの修道院でクインティリアヌスの『弁論家の教育』を発見したポッジオのように古典古代の教養にも深い造詣をもち、カトリックを出自としながらも、その体制に批判的な知識人は、その引き継ぎをこのライン流域のキリスト教フマニストに確実に託していた。ヨハネス・シュトゥルムは明らかにその系譜のうえにいたのである。

さらに、第三は、このシュトラスブルクの学校の教育制度上の位置についてである。この学校は、その設立の趣旨からして、大学への予備門というよりも、むしろこれ自体で完結した学校であった。

ラテン語の初歩から始め、最後に神学を学ぶという階梯の教育課程こそ、完結した学校を示す以外の何ものでもなかった。この点で、これと前後して開設されるザクセン侯国の学校（Schulpfortaなどの Fürstenschule）などとは趣をおおいに異にしている。ギムナジウムとは大学につながる学校とのイメージは、いまだ一般的には確立されてはいなかった。

しかしながら、こうして誕生したシュトラスブルクのギムナジウムもこれ以降、宗派、あるいは国境をめぐる戦いのなかで、おおきな変容を強いられてゆく。その動向については、すでに多くの研究や叙述もある（例えば、A. Schindling, *Humanistische Hochschule und freie Reichsstadt. Gymnasium und Akademie in Strassburg 1538-1621.* 1977では、大学「昇格」にいたる経緯が詳細に叙述されている）。1566年には神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン二世によってアカデミーの名称（Akademie、教育機関としてはHohe Schule）が授けられ、さらに三十年戦争の真っ直中の1621年には、やはり皇帝フェルディナント二世の政略（カトリック側に立っているはずの皇帝がプロテスタントの大学を認知）によって「大学」（universitas）の勅許を受け、これにともなって、一旦消えた格好になっていたGymnasiumが復活する。一方、シュトラスブルクから撤退したカトリックは西郊のモルスハイム（Molsheim）にライン地方のイエズス会士を糾合して、1580年にはコレギオ（collegio、神学校）を創り、シュトラスブルクを視野に、聖職者の養成に乗り出した。さらに、シュトラスブルクのギムナジウムが「大学」になったとき、教皇パウロ五世が「対抗」して、これを「大学」へと勅許を下した。これがシュトラスブルクに「戻る」のは、1702年のことである。このような状況は後代にまで存続するが、シュトラスブルクのギムナジウムは、フランス統治の時代には国立のコレージュ（collegẽ）となって、Gymnasium の名称は消える。その復活は1871年の普仏戦争の終結後のことであった。エンゲルがその復帰に、あらためて350年前のヨハネス・シュトゥルムの栄光を重ね合わせたのは、それからほぼ10年経った、まさにそのような安定の時代（第二帝政）であったことにも留意しておきたい。シュトラスブルクのギムナジウムに付された「プロテスタントの」protestantischという形容詞も時代を重く受け止めているように見える。

このようにして、Gymnasiumという古代ギリシア由来のラテン語名称は、度重なる領土の変更や支配宗派の問題はもちろん、ドイツ語からフランス語、さらにはその逆への基本言語変更の影響をまともに受けてきたが、第二次大戦後の1946年に、ようやく法定のLycéeないしはcollegẽ範疇の（大学への進学を目的とする）中等学校としてジムナーズGymnaseの呼称が認められ、1974年にはさらに法人格を得て、それ以降はジャン・ストゥュルムのジムナーズGymnase Jean Sturmの校称を維持している。

補 説　ニュルンベルクの学校改革

この補説では、パウルゼンの『教養教育史』（Fr. Paulsen, *Geschichte des Gelehrten Unterrichts.* 2. erweiterte Aufl. Bd.1. 1896　SS.151-154, SS.278-280）を主な拠り所にして、

宗教改革前後のニュルンベルク（Nürnberg）におけるラテン語学校を中心とした改革の動向を取り上げる。パウルゼンからの引用箇所の直接的な指示は煩雑さを避けるため、最少限にする。

ニュルンベルクの町はもともとヨーロッパの南から北への街道沿いにあったが、すでにその南に位置するフッガーの町アウクスブルクがかつては神聖ローマ帝国の軍事拠点であり、その後この利点から金融で繁栄し、ニュルンベルクもまた15世紀初頭以降は東から西への交通路が開け、東の鉱山から産出した銀などの貴金属細工、そして武具や刃物などの鉄製品の一大産業都市になった。リューベックからヴェネツィアに、さらにプラハからシュトラスブルクを経てパリに至る幹線が交差する交通の要衝となった。活版印刷の技術も、おそらくこの東西の道を通って、ニュルンベルクにもたらされたはずである。古典文献の印刷はほとんどバーゼル、シュトラスブルク、フランクフルト（マイン）、マインツ、ケルンといったライン地帯から、まもなくニュルンベルク、アウグスブルクなどの印刷工房へと発展、少し遅れてライプツィヒやルターの町ヴィッテンベルクなどがそれに加わった。このようなわけで、ニュルンベルクには優秀な職人がギルドをつくり、その黄金時代は15世紀の末、ハンス・ザックスなどのマイスタージンガーやアルプレヒト・デューラーの名とともに、その都市文化が広くヨーロッパに知れ渡った。ドイツ諸都市のなかでは人間形成の試みに熱心だった点で、おそらく最上の地位を占めていた。

市参事会が学校制度改革に着手した1485年当時、ニュルンベルクにはラテン語学校に相当する学校は4校あった。聖ゼーバルドゥス（St. Sebaldus）小教区教会（Pfarrkirche）の学校と聖ロレンツ（St. Lorenz）教区教会の学校と新救貧院（neues Spital）の学校と聖アエギディウスSt. Aegidius教会が付設されていた修道院（Schottenkloster）の学校である。聖ゼーバルドゥス教会の学校は学校教師を除いて聖歌隊長（Kantor）１名と３名の得業士（baccalarius）、聖ロレンツ教会の学校はそれに加えて奉公人（locatus）が１名、救貧院学校だけが得業士と奉公人が１名ずつ、聖アエギディウスの修道院学校には奉公人が１名いた。全体としては、４名の学校教師と12名の奉公人がいたことになる。生徒は２つの教区教会の学校におおよそ70名ずつ、他の２つの学校には60名と45名、したがって全部で245名の市民の子弟（Bürgerkinder）が就学していた。学校教師は、司祭との協議のうえ見習いを雇用した。学校教師は、無償の住居と司祭と同席しての食事を除いては、自らの生活を授業料と若干の副収入で賄っていた。1485年の改革まで救貧院の学校（Spitalschule）で存続していた授業に関しては、学校教師の記録に残っている（Paulsen, op.cit. S.152）。午前と午後のそれぞれ３時間が教会での勤行に割り当てられた。授業は同一の教場で行われたが、読み書きの進度に応じて３つの段階に区分された。最初の段階はドイツ語の読み書き、2段階目はラテン語の初歩、ドナトゥスの文典から成句（parstes orationis）、いわゆるアレクサンダーのギリシア語（コイネー）から活用変化（declinationes）を習得し、第３段階はその継続と発展。そして、文法の法則を福音書あるいはカトーの『道徳論』とヒスパヌス（Petrus Hispanus、ローマ教皇ヨハネス21世 1215-1277）の『論理学綱要』の基礎を学び、祝祭日には自らの福音書注

解を聴衆のまえで朗読した。

1517年からの宗教改革の動向は、この帝国都市にもおおきな影響を及ぼした。すでにメランヒトンは、その地の大学で教えていたテュービンゲンから新しい職場となるルターの町ヴィッテンベルクへ向かう途中の1518年８月、ニュルンベルクを訪れて市参事会のメンバーや有名なフマニストでもあるヴィリバート・ピルクハイマー（Wilibad Pirckhaimer 1470-1530）らと会い、学校改革について意見を交わしている。しかしながら、その動きが本格化するのは、宗教改革の帰趨が見えてきた1525年前後になってからのことである。1525年には、教会財産は市当局が管理するところとなり、さらに教会自体も福音派教会への転向を迫られた。聖ゼーバルドゥス、聖ロレンツの両教会、さらに聖アエギディウス教会と修道院もその対象となった。それらに付設されていた学校はひとまとめにされ、聖アエギディウス教会とともにあった修道院に移され、これが後代の「ギムナジウム」のもととなった。１年前の1524年、ルターらと個人的に交友のある２人の人物、ヒエロニムス・バルムゲルトナー（Hieronymus Barmgärtner 1498-1565）とラザルス・シュペングラー（Luz. Spengler 1479-1534）によって、「学校を創設」するという委員会決議がなされた。1526年5月23日、その「学校」は、自身の３回目のニュルンベルク訪問となったメランヒトンによって、前述の聖アエギディウス教会が付設されている修道院で開校した。自ら経営してほしいという度重なる市側などの依頼を、メランヒトンは謝絶した。その代わりに、彼の友人（フィリッピステン）であるヨアヒム・カメラリウス（J. Camerarius 1500-1574）とミヒャエル・ローティング（M. Roting 1494-1588）がヴィッテンベルクから、同様にヘス・エオバヌス（H. Eobanus 1488-1540）がエルフルトから推挙されてやって来た。さらに、数学者のヨハネス・ショーナー（J. Schoner 1477-1547）も招かれて、ニュルンベルクにやってきた。カメラリウスとエオバヌスは学校教師としてはこれまで例を見ない高給150フローリンを、他の２名も100フローリンを与えられた。この学校の1526年の学校計画は、本質的な部分においては、ルターの生誕地アイスレーベンで先行している学校と比較しても、それほど相異してもいなかった。ただ、数学が教授科目のなかに入れられていたことだけが目新しい。

新しい施設の本質的な使命は、これを「上級学校」（Oberschule）と呼称し、その教師を教授（Professor）と呼び、古い司教学校の授業をフマニスムの課程によって補うこと、そしてこれまでの大学学部のためよりもはるかに豊かな準備を施すことにあった。カメラリウスはギリシア語を教え、エオバヌスは詩学を、ローティングは修辞学と弁証法を、ショーナーは数学を教えた。授業料が不要なのにもかかわらず、入学者はきわめて少ないままであった。カメラリウスは、バウムガルトナーのために意見を開陳した（Paulsen, op.cit. S.278)。「神学生の寮の設立が、ただひとつのことだけの救いになるでしょう」。市参事会は、1529年、12名の少年、すなわち貧しい市民の息子たちに基金を手当することで、これに応じた。かつてのニュルンベルクはケルンやプラハとならぶ神聖ローマ帝国最大の都市のひとつであった。しかしながら、1525年に市当局が宗教改革を受け入

れたことで、皇帝との関係は次第に疎遠となり、「皇帝の街」としての権威は急速に失われていった。教授たちだけでなく、生徒たちにも、ルター主義の内実がしっかりと与えられなくてはならなかったのである。それにもかかわらず、1533年にエオバヌスが学校を去り、1535年にはカメラリウスも希望がもてなくなった学校を去った。

彼らは後に、アルトドルフ（Altdorf）に再び学校を創った。アルトドルフはニュルンベルクをほぼ東へ20キロ足らずの町で、15世紀にはそれなりの町並みができあがっていた。ここに、その学校を母体にやがて（1575年）メランヒトンの名を冠した学校ができ、それは1578年以降アカデミー（Akademie）と呼ばれ、約50年後の三十年戦争の最中（1628年）に神聖ローマ帝国皇帝の勅許を得て「大学」となった。アルトドルフィナ（Altdorfina）と呼称されるこの大学には、三十年戦争で皇帝軍の傭兵を率いて、スウェーデン王グスタフ・アドルフと対決した梟雄ワレンシュタインが、そしてドイツを代表する哲学者ライプニッツが学んだことでも有名である。すでに帝国都市ニュルンベルクの大学となっていたアルトドルフは、1806年の神聖ローマ帝国解体とともにバイエルン王国に移管され、1809年９月、主としてバイエルン王国の財政上の理由から廃校とされた。その後のニュルンベルクには、北隣のエアランゲン（Erlangen）の大学（1743年にブランデンブルク＝バイロイト辺境伯フリードリヒ・アレクサンダーによって創設、1810年にバイエルン王国に移管された）の一部の学部が開設され、創設者の名を冠するエアランゲン＝ニュルンベルク大学となる20世紀の後半まで、「大学」は存在しなかった。

ニュルンベルクの聖アエギディウス教会に創られた学校は、現在はメランヒトン・ギムナジウム、聖アエギディウス教会に近いズルツバッハ通りにあって、「ドイツで最初のフマニスムのギムナジウム」を名乗っている。1808年の11月から約8年のあいだ、哲学者ヘーゲルがこのギムナジウムの校長兼哲学教授として勤務し、その在職中に『大論理学』を刊行している。

【引用・参考文献】（シュトラスブルクとニュルンベルクの学校の成立に言及している主要なもの）

Fr. Paulsen, *Geschichte des Gelehrten Unterrichts*. 2. erweiterte Aufl. Bd.1. 1896

C. Engel, *Das Schulwesen in Straßburg vor der Gründung des protestantischen Gymnasiums* 1538. 1886

W. Sohm, *Die Schule Johann Sturms und die Kirche Straßburgs in ihrem gegenseitigen Verhältnis*. 1912

N. Hammerstein (Hrsg.), *Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte*. Bd.1. "*15. bis 17. Jahrhundert*" 2000

内田日出海『物語 ストラスブールの歴史』（中公新書）2009

梅根悟監修「世界教育史大系」第24巻『中等教育史Ⅰ』講談社　1975

【付 記】

シュトラスブルクのギムナジウムがギムナジウムという今日大学へとつながる学校名の「元祖」で、その沿革については、エンゲルの報告文書があらゆる記述の基本資料となっている。このことは、いまから50年ほどまえ、当時の東京教育大学での学部２年生対象の「西洋教育史概説」の講義で、長尾十三二先生からお教えいただいた。必死にとった当時のノートをあらためて繙き、往時を想い起こし、まことに感無量である。その講義の一部はコンデンスされて、梅根悟先生監修の「世界教育史大系」の第24巻『中等教育史Ⅰ』などに収められている。今年めでたく卒寿を迎えられた先生のご長寿を、あらためてお祈りしたい。

このたび、そのエンゲルに丹念にあたりながら、ひとつのヒストリーを描いてみた。もとより古稀をすぎた老骨の手にとうてい負えるはずもなく、かつて筑波大学の私のもとで学び、ドイツ近世教育思想の研究で学位を得た三輪貴美枝教授（滋賀大学教育学部）を、繁忙な学務の最中に無理を言って煩わせた。ニュルンベルク関する「補説」を寄せてもらったほか、人物などの調査など、大変な面倒をかけた。あえて共著者として名前を並べてもらった所以である。

なお、研究の推進にあたっては、筑波大学附属図書館および一橋大学附属図書館のお世話になった。また、そのとりまとめにさいしては、東日本国際大学の研究経費の援助を受けた。記して、感謝したい。

（Y.Y.　30. Sept. 2014）